



TITLE:

京大広報 No. 705

AUTHOR(S):

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

CITATION:

京都大学渉外部広報・社会連携推進室. 京大広報 No. 705. 京大広報
2014, 705: 4293-4308

ISSUE DATE:

2014-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196365>

RIGHT:



京大広報

No. 705

2014.11



平成26年度プロ野球ドラフト会議で指名された硬式野球部 田中英祐さん ー関連記事 本文4299ページー

目次

〈大学の動き〉

- 理事補が発令される.....4294
- 第2回京都大学ー国立台湾大学共催シンポジウムを開催.....4294
- 本学とチェンマイ大学(タイ)との大学間学術・学生交流協定の締結式を挙行.....4295
- 本学とキング・アブドゥルアズィーズ大学(サウジアラビア)との大学間学術交流協定の締結式を挙行.....4295
- 京都大学春秋講義(平成26年度秋季講義)を開催.....4296
- 京都大学名誉フェロー称号授与式を挙行.....4296
- 思修館第二研修施設「船哲房」除幕式を挙行.....4297
- 本学とフローニンゲン大学(オランダ)との大学間学生交流協定の締結式を挙行.....4297
- 中学生向けゼミ等体験講座「ジュニアキャンパス2014」を開催.....4298
- 名誉教授称号授与式を挙行.....4298
- 硬式野球部田中選手がプロ野球のドラフト会議で指名.....4299

〈寸言〉

- 人生と俳句 西村 義明.....4300

〈随想〉

- 地球科学と「ふるさと」意識 名誉教授 川崎 一郎.....4301

〈洛書〉

- 少しばかり昔の話 佐藤 啓文.....4302

〈話題〉

- 経済学研究科がタイ派遣プログラムおよびサマースクールを実施.....4303
- DIPCON/ARC-2014会議を開催.....4304
- 第14回環境技術学会年次大会を開催.....4305
- 京都大学テックコネクト(新技術説明会)2014Ⅱを開催.....4305
- 桂キャンパス自衛消防隊が西京自衛消防隊訓練大会に参加.....4306
- 「京都大学みんなのイシュー」が平成26年度グッドデザイン賞を受賞.....4307

- 〈計報〉.....4308

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

理事補が発令される

赤松美紀 農学研究科准教授および立川康人 工学研究科教授が理事補に11月1日付けで任命された。

(新任)

学生担当 赤松 美紀 農学研究科准教授 任期：平成28年9月30日まで

国際担当 立川 康人 工学研究科教授 任期：平成28年9月30日まで

第2回京都大学－国立台湾大学共催シンポジウムを開催

平成25年12月に開催された第1回のシンポジウムに続き、9月1日(月)、2日(火)の2日間、百周年時計台記念館において「第2回京都大学－国立台湾大学共催シンポジウム」を開催した。台湾大学からは110名を超える参加があり、本学からの参加者と聴講者をあわせると総勢300人を超える大規模なものとなった。

本シンポジウムは、昨年度策定された本学の国際戦略「2x by 2020」に基づいて開催されたもので、世界に卓越した知の創造を行う大学としての一層の発展、真のトップレベル大学としての地位の確立、国際社会におけるプレゼンスの向上を目的としている。

初日は、松本 紘 総長、楊 泮池(Yang Pan-Chyr)国立台湾大学長の挨拶に続き、三嶋理晃 国際担当理事・副学長、台湾大学からは張 淑英(Chang Shu-Ying)国際事務所長が、両大学の紹介を行った。その後、両大学の教員や研究者交流に関する大学間協定と、ダブルディグリープログラムに関する大学間協定の締結署名式を行った。この協定により、本学と国立台湾大学は、そのパートナーシップをさらに多層的かつ戦略的に強化し、国際共同研究や研究者・学生交流を推進することになる。

続く基調講演では、野田 進 工学研究科教授

が高性能超小型レーザーの開発について、国立台湾大学からは陳 建煒(Chan k. Arnold)医学院教授が医療関係の技術を商品化する産学連携推進事業についての講演を行った。

午後からは、自然科学系から人文社会系まで多岐にわたる14の分野に分かれて各々の研究発表を行い、今後につながる活発な議論を交わした。

夜のレセプションでは、河野泰之 東南アジア研究所長による特別講演や、本学学生によるアカペラが披露された。

2日目は、前日に引き続き各分野別のセッションが行われた後、分野ごとの討議成果や今後の共同研究の展望などについて報告が行われた。最後に、陳 良基(Liang-Gee Chen) 国立台湾大学副学長、吉川 潔 研究担当理事・副学長による閉会の挨拶で、2日間にわたるシンポジウムは盛況のうちに閉幕した。

(研究国際部)



研究者交流協定書に署名



集合写真

本学とチェンマイ大学(タイ)との大学間学術・学生交流協定の締結式を挙行

本学とチェンマイ大学との大学間学術・学生交流協定締結式が9月2日(火)にチェンマイ大学で行われた。

本学からは、松本 紘 総長の代理として森 純一 国際交流推進機構長、石原慶一 エネルギー科学研究科教授、柴山 守 ASEAN拠点所長らがチェンマイ大学を訪れた。締結式には、藤井明彦 在チェンマイ日本国総領事館総領事も出席され、両大学の交流が両国のさらなる懸け橋になることを期待する旨の言葉をいただいた。

その後、森機構長、Niwes Nantachit(ニウエスナタチット)チェンマイ大学長から本協定締結に至る感謝と今後の期待の言葉が述べられ、締結式が執り行われた。

今回協定を締結したチェンマイ大学と本学は、既に農学研究科や東南アジア研究所、化学研究所が部局間協定を締結しており、フィールドスクールやサ



大学間学術・学生交流協定書に署名

マースクール等、活発な交流が行われているが、今回の大学間協定締結に伴い、学生や研究者の交流、共同研究の実施など、全学的な交流をますます深めていく予定である。

(研究国際部)

本学とキング・アブドゥルアズィーズ大学(サウジアラビア)との大学間学術交流協定の締結式を挙行

本学とキング・アブドゥルアズィーズ大学との大学間学術交流協定締結式を9月17日(水)に百周年時計台記念館2階迎賓室で行った。

まず、小杉 泰 アジア・アフリカ地域研究研究科長、横峯健彦 工学研究科准教授と河原全作 同講師より同大学との共同研究に関する状況が報告された。

続いて、松本 紘 総長から今後の両大学間の研究交流発展への期待が表明され、ウサマ・タイーブ (H. E. Dr. Osama S. Tayeb) 学長が協定締結の御礼、協力関係の推進についての抱負を述べられたのち、協定書に署名した。

本学がサウジアラビア王国の大学と学術交流協定を締結するのはキング・アブドゥルアズィーズ大学が初めてとなるが、両大学の交流としては平成24年からワークショップを開催するとともに、同国で毎年開催されている国際高等教育フェアに本学も出展



大学間学術交流協定書に署名

するなどの協力関係が築かれている。

本協定締結に伴い、今後、学生や研究者の派遣、すでに行っている共同研究のさらなる発展など、ますますの交流が期待される。

(研究国際部)

京都大学春秋講義(平成26年度秋季講義)を開催

京都大学春秋講義は、本学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、昭和63年秋から開講している公開講座である。

今回はメインテーマを「生命と老化を考える」として、2日間にわたり、合わせて4名の講師が百周年時計台記念館において講義を行った。1日目の9月13日(土)には、斎藤通紀 医学研究科教授から「生殖細胞：生命を継承する仕掛けを探る」、垣塚 彰 生命科学研究科教授から「難病への挑戦」、2日目の9月27日(土)には、石川冬木 生命科学研究科教授から「老化からみた人の一生」、カール ベッカー こころの未来研究センター教授から「安心して終焉を迎える日本的な看取り：その準備、受容、意味」と題した講義があった。2日間で1,274名の参加があり、各講義後には活発な質疑応答が行われ、大いに盛り



会場の様子

上がった。

参加者からは「難しい点多々あったが、大変興味ある講義だった」、「最先端の医学情報に触れられ、今後の発展に期待したい」、「老化のプラス面を初めて知り、興味がわいた」、「今後の生き方に大変参考になった」などの感想が寄せられた。

(渉外部)

京都大学名誉フェロー称号授与式を举行

このたび、船井哲良 船井電機株式会社取締役会長に、京都大学名誉フェローの称号を授与することを9月8日(月)に決定し、9月29日(月)に授与式を举行した。

本学では、(1)本学の国際交流に寄与した功績が特に顕著である者、(2)本学に教職員、学生等で所属又は在学した者であって、特に優れた業績により国内外で高い評価を受けた者、(3)本学の運営および経営に特に顕著な貢献があった者等で、本学において顕彰することが適当と認められる者には、名誉フェローの称号を授与することができることとしている。

平成25年4月15日には、アウン・サン・スー・チー ミャンマー国民民主連盟議長に本学第1号を授与し、また同年8月28日には稲盛和夫 京セラ株式会社名誉会長・公益財団法人稲盛財団理事長および山内 溥 任天堂株式会社相談役の両名に第2号を授与したところである。

船井取締役会長については、本学の運営および経営に特に顕著な貢献があったと認め、名誉フェローの称号を授与した。

授与式では、表彰状と楯の贈呈が行われた後、松



記念撮影の様子(前列右から2人目が船井氏)

本 紘 総長から「京都大学だけでなく日本のために、研究者・学生に大きなご支援をいただいた」と感謝の言葉が述べられ、引き続き船井取締役会長から「この度の榮譽を汚すことのないよう、さらに精進し努力を積み重ね、今後も京都大学に貢献していきたい。京都大学もグローバルな人材を育成し、後世に残るような優秀な人材を輩出されることを心から願っております」との話があった。

その後、授与式参加一同による記念写真の撮影、松本総長、船井取締役会長の記者会見が行われ、名誉フェロー称号授与式は終了した。

(総務部)

思修館第二研修施設「船哲房」除幕式を挙行政

本学は、平成23年度に採択された文部科学省博士課程教育リーディングプログラム(オールラウンド型)「京都大学大学院思修館」のプログラム理念に基づいた教育を実施するため、平成25年4月に独立した大学院として、総合生存学館(通称：思修館)を設立した。

この思修館プログラムの実施の「場」の一つとして、平成25年に完成した思修館第一研修施設「廣志房」(こうしぼう)に引き続き、思修館第二研修施設「船哲房(せんてつぼう)」が7月に竣工し、この施設の建設に多大なご厚志を頂戴した船井哲良 船井電機株式会社取締役会長にも参加いただき、船井取締役会長ご自筆の銘板の除幕式を9月29日(月)に挙行政した。

はじめに松本 紘 総長から挨拶があり、続いて、船井取締役会長、松本総長、西阪 昇 施設担当理事・副学長、稲葉カヨ 男女共同参画担当副学長、川井 秀一 総合生存学館長、大寫幸一郎 同副学館長・研修施設長、白石愛理 同大学院生が除幕を行った。除幕式には、京都市、左京消防署、地元の吉田消防分団、町内会からの出席者や学内関係者など約100



除幕式の様子

名もの参列があり、希望者による施設の内覧が行われた。

その後施設を利用する学生に向けて船井取締役会長による講演があり、何事も懸命に取り組むことの大切さについてご自身の経験談を交えてお話いただいた。

本施設では学生が異文化・異分野出身の仲間と互いに切磋琢磨しながら日々の起居を共にし、多彩なバックグラウンドを持つ学生同士や教員との議論を通じ、多様な思考と実践力を培っていく場とすることを重視している。

(大学院総合生存学館)

本学とフローニンゲン大学(オランダ)との大学間学生交流協定の締結式を挙行政

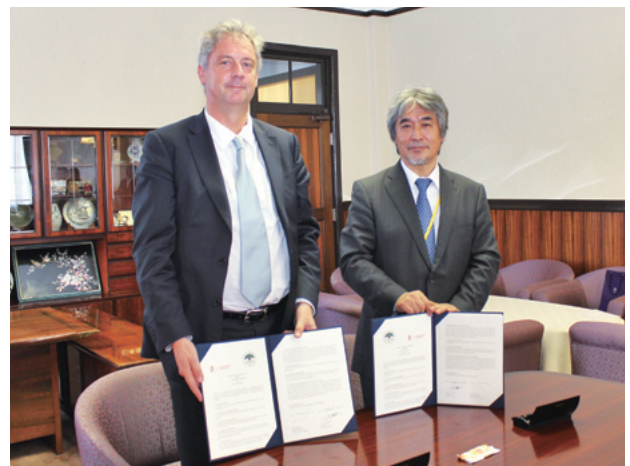
本学とフローニンゲン大学との大学間学生交流協定締結式を10月7日(火)に百周年時計台記念館2階迎賓室において行った。

山極壽一 総長とエルマー・シュテルケン フローニンゲン大学長が、今後の両大学の交流発展についての意見交換を行ったのち、協定書に署名した。

今回協定を締結したフローニンゲン大学は、ヨーロッパの大学連盟の一つであるコインブラグループ(Coimbra Group)に加盟し、大学間の国際的なネットワークに参加するなど、積極的、戦略的な対外活動を行っており、本学とも平成25年に既に大学間学術交流協定を締結している。

今回の学生交流協定の締結により、研究者交流のみならず、学生交流や共同研究の実施など、これまで以上に協力関係を深めていくための制度が整った。

本学とオランダの大学との学生交流協定の締結はライデン大学、ユトレヒト大学に続いて3校目となる。



大学間学生交流協定書に署名

(研究国際部)

中学生向けゼミ等体験講座「ジュニアキャンパス2014」を開催

中学生に学問の最先端に触れてもらうことを目的として「ジュニアキャンパス2014」を京都市教育委員会との共催により9月20日(土)、21日(日)に開催した。

今年で10回目を迎えるジュニアキャンパスは毎年好評で、今年度は中学生約370名、保護者等約120名の参加者で賑わった。

初日の午前中は、百周年時計台記念館において開講式およびオリエンテーションを実施後、「植物は何を食べているのか? -動物の栄養, 植物の栄養-」と題して 間藤 徹 農学研究科教授の特別講義を実施した。実際に稲の根の観察を交えながら、植物が何を栄養として大きく成長するのかについての講義があり、終了後には、参加した中学生や保護者から熱心な質問があった。

初日の午後と2日目は、各キャンパスの研究施設や講義室等において実験、実習、観察など体験型のゼミや、テキストをもとに議論するゼミなど32講座を開講した。大学院生等が中心となって企画・運営する若手研究者特別ゼミは、「英国ヴィクトリア朝期の社会と文学」や「古生物学～スナメリの骨から考えるイルカの進化～」といったテーマで実施され、大いに盛り上がった。昼休みには「大学院生等によるポスターセッション」があり、普段、大学でどのような研究を行っているかを中学生に分かりやすく説明するコーナーを設け、多くの中学生で賑わった。また、総合博物館、附属図書館も開放し、2日間を通じて本学のさまざまな研究に触れる機会を参加者に提供した。



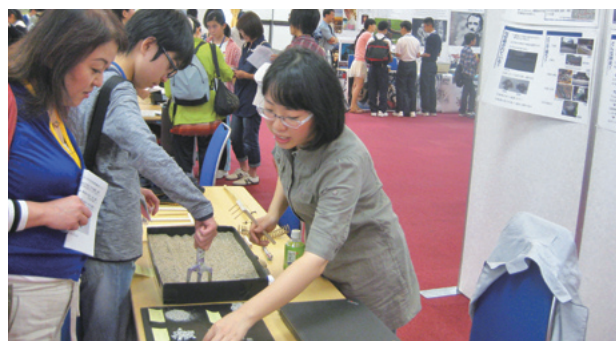
ゼミ「測地学 -重力を測って地球を探る」



ゼミ「環境を測る技術と衛る技術 -環境工学の基礎-」



ゼミ「留学生と一緒に世界の環境問題を考えよう」



大学院生等によるポスターセッション

(学務部)

名誉教授称号授与式を挙行政

9月29日(月)の午後1時30分から総長応接室において、高橋雅之 総務部長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行政され、松本 紘 総長から当日出

席の江崎信芳 元化学研究所教授に称号が授与された。

また、10月2日(木)の午前11時30分から同室にお

いて、上本伸二 医学研究科長の出席のもとに同授与式が挙行政され、山極壽一 総長から当日出席の宮地良樹 元医学研究科教授に、称号が授与された。

称号を授与された方は次の2名である。

(氏 名)	(推 薦 部 局)
江 崎 信 芳	(化学研究所)
宮 地 良 樹	(医学研究科)



松本総長より称号を授与される江崎元教授



山極総長より称号を授与される宮地元教授

(総務部)

硬式野球部田中選手がプロ野球のドラフト会議で指名

10月23日(木)、硬式野球部の田中英祐 選手(平成23年度入学・工学部工業化学科)がプロ野球の新人選手選択会議(ドラフト会議)で千葉ロッテマリーンズから指名(2位)された。指名直後の記者会見では、



記者会見の様子(左から、實部長兼監督、田中選手)

終始緊張した様子であったが、会見後、吉田南グラウンドで硬式野球部の仲間に迎えられた時は、ほっとした表情で皆と喜びを分かちあった。



球団からの指名挨拶を受ける様子



山極総長と握手を交わす田中選手

田中選手は、翌日に球団から指名の挨拶を受け、10月29日(水)には、寶馨 部長兼監督、青木孝守 助監督とともに山極壽一 総長のもとを訪れ、指名の報告を行った。山極総長からは「失敗をおそれず、何にでも立ち向かってほしい。残りの学生生活をやり切り、これから文武両道を続けてください」という激励を受けた。

入団が決まれば、本学硬式野球部から初のプロ野球選手が誕生することになる。

(学務部)



チームメイトらに祝福を受ける田中選手

寸言

人生と俳句

西村 義明

「名月や 賀茂の河原に
影一つ」(1年生, 一人の散歩)

「名月や 賀茂の河原に
影二つ」(2年生, ガールフレ
ンドと)

「名月や 賀茂の河原に
影三つ」(3年生, 友人カップ
ルと私)

「名月や 賀茂の河原に 影四つ」(4年生, 麻雀
仲間との帰り)

私が京大で過ごした4年間は、学園紛争の最中であり、授業をほとんど受けることができなかった。つまり、これほど学生に「自主性」を求められた年代はなかったのである。私は、丹波の故郷からの仕送りと奨学金、アルバイト代を合わせて、やっと家賃と生活費を賄う生活だったが、手当たり次第に読書にふけったり、北海道への貧乏旅行では旅先で資金が底をつき、アルバイトを探してなんとか復路の運賃を確保したりと、有り余る時間を使いながら、一生懸命に「生きて」いた。そのなかで、私にとって一服の清涼剤のようなものが、俳句だった。

これだけを聞くと、それなりの風流な学生時代を想像されるかもしれないが、私が当時したための俳句の多くは、情緒豊かな自然とも人間の機微とも無縁な、貧乏で素朴な学生の生活を包み隠さずに表現したものである。冒頭の句は、私の4年間の大学生活を、賀茂川の河原に映る影を使って表現した“自信作”である。結果的には、あまり勉強はしなかったが、楽しい学生生活であった。

「名月や 下宿の窓に パンツ干し」

「徹マンを 終えて目に染む 白牡丹」

こうした4年間を経て、京大を卒業した私は、メーカー希望ということで住友電気工業株式会社に入社した。社会人になって最初の転機は、入社7年目でのアフリカ・ナイジェリア赴任だった。未開の地に明かりを灯す電線を製造するという、非常にやりがいのある仕事であった。妻と誕生したばかりの長男を連れてのナイジェリア生活は結構厳しいもので

あったが、ここでも、季語は夏しかないものの、いくつかの俳句を詠んだ。

「マラリアに 臥して蚊を打つ 夜の暗さ」

「一才の子と アフリカの 昼寝かな」

「吾子寝かし 妻と異国の 月見かな」

「片蔭に 傾き眠る マンゴ売り」

帰国後、経理・人事畑を歩むようになると、俳句に触れる時間の余裕も少なくなっていったが、わずかな時間を見つけては、句を詠むことを忘れないようにした。この習慣は、同社の役員に、さらに平成20年に住友電工の子会社である東海ゴム工業株式会社に移ってから続けた。翌年の社長への就任後も、相次ぐ海外現地法人の設立、新事業への参入、欧州・南米企業の買収と、事業拡大に奔走し、今年10月1日には「住友理工株式会社」へ商号を変更した。この間、多忙を極めたが、やはり俳句は私の清涼剤であった。

「仕事終え ビルの谷間の 大西日」

(大阪・淀屋橋の住友電工本社勤務時代)

「テムズの 流れに消えし 春の雨」

(ロンドン出張)

「短日や 人も機械も 止まりけり」

(リーマン・ショック後)

「バンカーに ボール1つの 酷暑かな」

(ゴルフ場にて)

私のこれまでの人生を、俳句とともに振り返ってみて、気づいたことがある。学園紛争のなかで時には立ち止まり自分を見つめることもあった京大時代、生きる勇気を家族とともに培った異国の地ナイジェリア赴任、仕事に没頭した経理・人事畑時代、経営トップとしてのこの数年……。今、思えば心の片隅に常に俳句があり、またその原点は京都、そして京大であった。

当社にも、毎年多くの学生が入社するが、自分自身の心の拠り所を持っている人間は強いと実感する。文学でもスポーツでも何でもよい。大学時代に熱中した経験は、社会での逆境に必ず打ち克ってくれる。そんな仲間を得て、早く酒を酌み交わしたいものだ。是非、住友理工で会いましょう！

(にしむら よしあき 住友理工株式会社 代表取締役社長 昭和47年経済学部卒業)

随想

地球科学と「ふるさと」意識

名誉教授 川崎 一郎

今年の6月、『防災と復興の知 3・11以後を生きる』を大学出版部協会から上梓させて頂いた。哲学者(座小田 豊 東北大教授)、水産学者(田中 克 京大名誉教授)、地震学者(川崎)が、それぞれの分野で、東北地震を契機に、我々が何処から来て何処に行こうとしているのか、考えていることを述べ合った。田中先生は、よく知られているように、「森里海連環学」の提唱者である。



2世紀末、奈良県桜井市北部で山地と接している低位段丘面(数万年前に形成)に纏向遺跡群まきむくが出現した。そこは、多くの考古学研究者から、戦いに明け暮れた弥生時代を終息させて平和をもたらした卑弥呼の王都と想定されている。3世紀中頃には、纏向遺跡群の南端に巨大な前方後円型古墳が造営された。卑弥呼の墓と想定されている箸墓古墳である。その後も、古墳時代の王都の多くは低位段丘面や中位段丘面(数万年～10数万年前)に作られた。段丘面は、洪水や土石流のリスクが低く、そのため形成時の特徴を残している場所である。

私は、このような認識を足がかりに、「私たちが歴史的建造物が建ち並ぶ奈良公園や京都東山の風景を美しいと思うのは、纏向遺跡以来、山地と段丘面が接している場所が安全の場であり、祈りの場であった2000年の時間が凝縮されているからではないか」と、歴史都市の美意識についての考えを述べた。

そこから歩を進め、「地震、洪水、土石流などによって生活インフラが破壊され、人々が長く苦しめられたに違いがない災害を無視してきた歴史学」と「日本の社会を脆弱にした格差や、災害をアジアの発展途上国に転移した自由貿易の負の側面を無視してTPPを推進する経済学」に恐れをせずにオブジェクションをとらえた。

座小田先生が想いを込めて「ふるさと」を語るのを聞き、「ふるさと」は私の心に根を下ろした。話題は『防災と復興の知』からは外れて行くが、私たちの「ふるさと」意識は、石川啄木の『一握の砂』によるとこ

ろが多い。それは、風景、人々、言葉であり、祭礼、食だと言えよう。それらを手がかりに「ふるさと」を蘇らせようとしている東北地震の被災地の人々の報道に接して、却って元気づけられた人は多い。

定年退職後に富山に住み、立山の雄姿を飽きず眺めているうちに、私は、「ふるさと」意識も卑弥呼の時代に遡るのではないかと考えるようになった。

『古墳とその時代』(白石太一郎、2001)には、箸墓古墳の造営や葬礼祭祀に際して遠隔地の首長が参加したことが認められると述べられている。

ここから私の連想になる。各地の首長が参集したのなら、越中の王たちも参加したとしても不思議ではない。葬礼からの帰途、国境の峠から立山を望んで従者と共に感動を新たにしたのであろう。言葉が統一されるのは文字の使用を通してであろう。従って、3世紀の方言は今より極端だったはずである。峠から下って人々の言葉を聞いた王たちの安堵感は、今よりはるかに大きかったに違いない。これらはまさに「ふるさと」意識と言うことができよう。

卑弥呼とほぼ同時代に神通川流域を支配した王の墓と思われる王塚古墳(富山市婦中町。標高～120m。数10万年前に形成された高位段丘面)から素晴らしく立山が望めるのはもちろん、庄川流域から氷見を支配した王の墓と思われる桜谷古墳(高岡市太田。標高～20m。260万年以前の第三紀層)からも、海を越えて立山が遠望できる。古代の人々は、立山が望め、交通の要衝を眼下におさめ、災害リスクが小さいことを意識して王が眠る場所を選んだに違いない。なお、桜谷古墳の下は、奈良時代中期、若き国司大伴家持が従者と馬を並べて駆けつけた洪谿(今の雨晴海岸)である。

このような考えに思い至ったとき、古代の人々の意識に触れたような気がしてうれしかった。

過去の大地の営みを探る学問は、文字による記録がない時代の人々の意識に触れるポテンシャルを持っている。それは自然科学の人文科学的可能性と言えるのではないだろうか。紙数の制約で論理が飛ぶが、文と理の2つの文化の隔絶を超えて学問が一層発展することを願ってこの稿を終えたい。

(かわさき いちろう 平成22年退職 元防災研究所教授 専門は地震学・測地学)

洛書

少しばかり昔の話

佐藤 啓文



今出川の緩やかな坂を上がり、白川の交差点を越えると空気が少し変わる。西側が日常的で生活感が溢れているのに比べると、東側は昼ならば華やき、夜ならば静まりかえる感じだろうか。「大」の字を眺めながら疎水に沿って東進

し、銀閣寺橋を渡ったところで観光客の喧噪を避けて、左手の細い路地に入る。如意岳に近いために道は少し上り気味で、坂の途中、ほどなく下宿が見える。道に面した母屋の二階に三つ並んだ真ん中が私の部屋で、一階には大家さんが住んでいる。古い造りではあるものの、日当りは良く、丁寧に磨かれて黒光りする廊下と、一万八千円の家賃で即決した。四畳半一間に一畳程度の調理台と半畳の押し入れ、流しもトイレも共同だった。母屋の東側をすり抜けた奥にある別棟には設置間もないコインシャワー（百円入れると10分お湯が出た）があり、生協の紹介ではセールスポイントの一つとのことだった。

部屋が暖かい陽だまりの中にある春秋の素晴らしさは筆舌に尽くしがたい。ただ夏は日中屋根が照りつけられ、寝苦しい日が続いた。木造建築でクーラーはもちろん付けられない。不憫に思った先師は「佐藤君これあげろよ」と古い扇風機をくださった。冬は天窓などから外気が入って寒さもひとしおで、布団の偉大さを思い知った。古典文学の季節観を分かっているつもりだったが、身をもって多少は正しく認識できるようになった気がした。部屋には大家さんに借りたしっかりした木製の机があったが、テレビは持っていなかった。もちろん携帯も固定電話もなく、廊下にピンクの公衆電話があった。研究室では日常的に電子メールを使っていたが、wwwは未だあまり普及していなかった。如意岳に近く山肌で乱反射されるためか、後に開局したローカルFM局を除けばラジオは殆ど入らなかった。代わりに週末の夜にでもなると山中で放歌されている「新生の

息吹」が時々聞こえて来た。週末だけは自炊していたが、周囲の公設市場は日曜定休で、よく今出川通や丸太町通沿いの何軒かの古本屋をはしごした後、遠くまで買い物に出かけた。市場は徐々にスーパーマーケットへ衣替えされつつあり、大型資本の進出がどうこうとか、京都ホテルやら京都駅の建て替えやらがかまびすしい頃だった。まだ辺りにコンビニエンスストアは殆どなく、友人と呑んで夜中にお酒がなくなると、川端通り沿いの23時まで営業している店までトボトボ歩いていった。

下宿の隣の部屋は文学部の学生で、壁一面が本棚だった。二十巻ものOED(Oxford English Dictionary)を個人で持つものなんだなあ、と妙に感心したものだ。理学系の物質観・認識観は彼にとっても新鮮だったのかもしれない。時折、ボソボソ喋りながら呑んだり、夜中に二人で琵琶湖までドライブしたこともあった。彼が下宿を出た後は残していく本の処理を頼まれた。「凄く良い本を持っている人が、それらをみな持って行った結果残ったモノ、って感じやね」と言って古本屋のオヤジは一万円ばかりをくれ、後日やってきた彼にそれでもって北白川のどこかの店でごちそうになった。自身が下宿を引き払う時はガラとした部屋で充実した日々をもう一度噛み締め、外階段を降りる前に一度だけ振り返って黒光りする廊下をみたように思う。

百周年時計台記念館の歴史展示室には昭和初期の下宿の様子が再現されている。昔の知り合いを案内すると「なんだ、佐藤が居た下宿と一緒にだな」としばしば言われ、確かにそう見えなくもないような気がしてくる。私が下宿を出たのは、たった(?)18年前、平成の話である。バストイレ付きのいわゆるワンルームマンションが主流になりつつあったが、私の下宿生活もとって立てて特別だった訳ではない。時を経て変わらないものがある一方で、世の中の変化は確かに加速し続けている。制度が変わらないならば定年まで20年あまり。最近、中間点に立ったことを少し意識せざるを得ない。

(さとう ひろふみ 工学研究科教授 専門は理論化学)

話題

経済学研究科がタイ派遣プログラムおよびサマースクールを実施

経済学研究科は、タイ派遣プログラム(フィールド調査)およびサマースクールの二つの国際交流プログラムを実施した。

タイ派遣プログラムは本学より10名(経済学研究科7名, 農学研究科1名, アジア・アフリカ地域研究研究科1名, 教育学部1名)の学生が参加し, 8月31日(日)から9月12日(金)にかけて催行された。

プログラムの前半はバンコクおよびその近郊においてタマサート大学国際学部との協力を得て行われた。タイの現状を多角的に捉えるため, 講義へ参加するだけではなく, バンコクや古都アユタヤの文化遺産, サラブリー県のノンケー工業団地やチャルーンポーカパン(CP)フーズ食品加工団地, イオン現地法人のスーパーマーケットなど現地企業を実際に訪問した。また, タマサート大学やチュラロンコーン大学の大学院生と合同で国際ワークショップを開催し, 各々の研究テーマの発表, 討論を通じて現地学生との交流を深めた。

プログラムの後半はプーケット県に移動し, 官庁や農場, 市民社会団体などを訪問した。ここでは, 同地域における喫緊の課題や政府事業などについて複数の視点から全体像を捉える目的で, プーケット県知事へのインタビューのほか, プーケット労働雇用事務所所長によるレクチャー, そしてプーケット農業普及所副所長とのディスカッションの機会が持たれた。さらに, タイ農業をより深く知るために, パイナップル農場, 天然ゴム研究農場, 有機ヤギ農場などを見学するとともに, 廃棄物処理NGOと地域住民主体の研修センターを訪れ, 社会における市



タマサート大学の学生達と京都市内見学へ

民社会団体の役割について学ぶ機会を得た。

12日間の多忙なスケジュールであったが, 参加した日本人学生からは「素晴らしいプログラムのおかげで, タイ, 日本そして世界について多くを学ぶことができた」とのコメントが寄せられた。

サマースクールは9月13日(土)から21日(日)まで9日間の日程で, タマサート大学国際学部からタイ, インドネシア, ミャンマー, 韓国, 米国出身者を含む大学院生14名と教員を迎えて実施された。

本プログラムは日本・ASEANの持続可能な制度構築について学べる内容となっており, 本学の教員陣によって「日本の文化と歴史」, 「日本のコーポレート・ガバナンスと産業競争力」, 「ASEAN地域における政治経済と開発問題」, 「日本とASEANの関係」など, 持続可能な経済・社会・環境に関連する多様なテーマで講義が開講された。また, 講義(理論)と同時にフィールドトリップ(実践)も多く組み込まれており, この二本柱それぞれにおいて分析・研究



プーケット県知事へのインタビューの様子



修了証授与式にて記念撮影

を深め、かつそれらが有機的にリンク、同時進行していくようカリキュラムが組まれているのが特徴である。

その例として、まず歴史文化の講義を受けた後は、清水寺で「青龍会」の行事見学と歴史的名所の散策が組み合わされ、西陣織会館と京セラミュージアムの見学に先立っては日本の産業についての講義が開かれた。また、農業・食料問題について学んだ際には、日本での有機農業の第一人者である尾崎 零氏を訪ねて大阪・能勢町へと足を伸ばし、実例を確

認するなど、短期間ながら様々な体験を通じて多くを学ぶことができた。

日程の最後には、岩本武和 経済学研究科長より学生一人ひとりに修了証明書が手渡され、全プログラムが締めくくられた。京都での生活や本学での学びを知るには9日間は短かったが、参加学生からは、「全てのプログラムが興味深く、今まで考えもつかなかったような見識や知識を得ることができた」との言葉を聞くことができた。

(大学院経済学研究科)

DIPCON／ARC-2014会議を開催

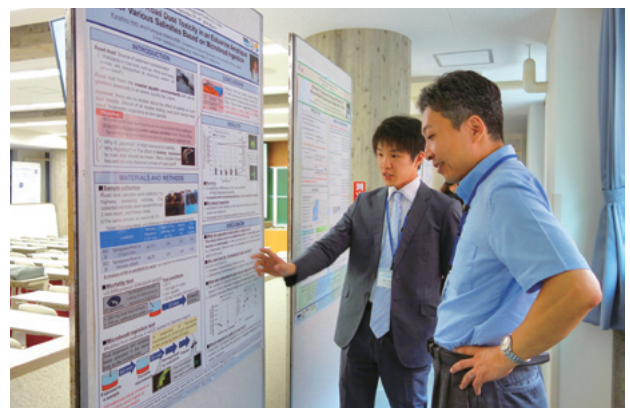
第1回DIPCON／ARC会議(国際水協会IWA・日本水環境学会JWSE主催、地球環境学堂・工学研究科・森里海連関学教育ユニット共催)が9月3日(水)と4日(木)に、吉田キャンパス総合研究3号館にて開催された。本会議は、IWAの拡散汚染DP(Diffuse Pollution)に関する専門家グループの会議DIPCON(Diffuse Pollution Conference)の、最初のアジア地域会議ARC(Asian Regional Conference)であり、日本からの31名を含め、アジアを中心とした11ヶ国から78名が参加して行われた。

初日の会議は、藤井滋穂 地球環境学堂・学舎長の歓迎の挨拶、同専門家グループ議長のSung-Ryong Ha 忠北大学教授による開会宣言で開始された。続いて、口頭発表とポスター討議を組み合わせたハイブリッド方式で、4セッション41件の発表が行われ、

農地・林地・都市における水・大気・土壌などの汚染問題とその対策などDPに関する様々な研究が紹介された。さらに特別セッションで、日本、韓国、台湾、ベトナム、ラオスの5ヶ国からDP問題が紹介されるとともに、パネルディスカッションにより各国の独自の問題と共通性に関して、フロアーも含め活発に討議された。翌日は、日本におけるDP問題の実態把握とその対策(BMPs: Best Management Practices)の視察のため、天ヶ瀬ダム、アクア琵琶、砂防ダム(オランダ堰堤)および琵琶湖周辺を見学するテクニカルツアーが実施された。参加者は、日本の最新のDP対策技術を知るとともに、それにより改善された環境を体験する有用な機会を得て、最後には次回平成28年度の開催地、韓国での再会を約束し、盛況のうちに閉会となった。



テクニカルツアー(天ヶ瀬ダムにて)



ポスター発表での討議の様子

(大学院地球環境学堂・学舎)

第14回環境技術学会年次大会を開催

第14回環境技術学会年次大会(環境技術学会主催、工学研究科/地球環境学堂・学舎/森里海連関学教育ユニット共催、APEC環境技術交流促進事業運営協議会後援)を9月4日(木)・5日(金)に吉田キャンパス総合研究3号館、4号館にて開催した。

4日は「京都・滋賀の歴史巡り－世界遺産と琵琶湖水環境管理」と題して、天ヶ瀬ダム、アクア琵琶、オランダ堰堤、琵琶湖周辺を見学するテクニカルツアーをDIPCON/ARC会議と共同で実施した。

5日の午前は、水環境、水処理、廃棄物、地球環境、エネルギー、環境経済・政策、有害微量物質、土壌、地下水に関する計47件の口頭発表が行われ、

110名が参加した。午後は、13件のハイブリッド発表(口頭発表+ポスター発表)が行われた。さらに「東アジアの越境汚染30年間の顛末と今後」について、藤田慎一 電力中央研究所名誉研究アドバイザーによる特別講演会が行われ、1970年代から80年代での酸性雨から近年の越境大気汚染に関して、歴史的な経緯の説明が行われた。平成22年の東アジア酸性雨モニタリングネットワーク、同25年の中国のPM2.5騒動の件などが報告され、平木隆年 兵庫県環境研究センター大気環境科長、市川陽一 龍谷大学教授との対談を行った。



天ヶ瀬ダムの説明の様子



アクア琵琶での見学の様子

(大学院地球環境学堂・学舎)

京都大学テックコネクト(新技術説明会)2014Ⅱを開催

工学研究科附属学術研究支援センターでは、9月12日(金)に桂キャンパスイノベーションプラザにおいて、京都大学テックコネクト(新技術説明会)2014Ⅱを開催した。今回は今年3月7日の開催に続く第2回目の開催で、企業を中心に、50名を超える参加があった。

第1部の技術説明会では、「ものづくり」をテーマに、「電気」、「機械」、「材料」の各分野4名の研究者がそれぞれの研究成果を発表した。特に今回は、若手の研究者により、企業の参加者にとって理解しやすく、かつ具体的な応用も見える形の講演であったため、講演後の個別相談では列ができることも

あった。

第2部の交流会では、企業等参加者と講演発表者、伊藤紳三郎 工学研究科長および吉崎武尚 副研究科長等との交流の場を設け、様々な技術質問や意見交換などで、熱心な話し合いが続いた。交流会には京都府、京都市に関わる産学連携コーディネータの方々も多数参加し、広く産学公連携マッチングの交流の場となった。また、併設して、ベンチャー企



技術講演会の様子

業を中心とした企業のポスター発表とデモ展示も行い、各ブースから展示内容の説明があり、参加者間の交流も盛んに行われた。

学術研究支援センターでは、今後も桂キャンパスイノベーションプラザにおいて、年2回を目処に、様々なテーマで本会を開催し、産業界と大学のマッチング、連携の足がかりの場を設けたいと考えている。



交流会の様子

(大学院工学研究科)

桂キャンパス自衛消防隊が西京自衛消防隊訓練大会に参加

9月17日(水)、嵐山東公園運動場で行われた西京自衛消防隊訓練大会に、桂キャンパス自衛消防隊が参加した。

桂キャンパス自衛消防隊は、昨年度から同訓練大会に参加しており、昨年度は消火器操法訓練に出場、

今年度は屋外消火栓操法訓練に出場し、日ごろの練習の成果を発揮した。

桂キャンパス自衛消防隊は、隊長である小西康行 事務部長のもと、火災発生時に迅速かつ的確な行動ができるよう、今後も訓練を実施していく。



西京自衛消防隊訓練大会参加者



屋外消火栓操法訓練の様子

(大学院工学研究科)

「京都大学みんなのイシュー」が平成26年度グッドデザイン賞を受賞

昨年度、文部科学省「大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業」として実施した「京都大学みんなのイシュー」が、平成26年度グッドデザイン賞(主催：公益財団法人日本デザイン振興会)を受賞した。

<http://www.g-mark.org/award/describe/41871?token=2Iy40LIwq0>

「京都大学みんなのイシュー」では、大学と社会の連携や研究成果の活用が大学の主要な経営課題となっている中で、これまでの企業との共同研究というスタイルではなく、社会からのニーズのくみ取り、シーズ技術の発信、市民視点のデザインの力で大学横断的なプロジェクトを創造することを目的として、大学関係者と大学外の人々が協働するワークショップを複数回開催し、組織や立場を越えたコラボレーションを可能とする場づくりを行った。



町家スタジオ(京都会場)でのワークショップ

これにより、大学がネットワークや技術を提供することで、イノベーションを起こすためのプラットフォームたり得ることを認知してもらい、市民や企業が繋がり、実際にいくつかの技術とニーズによるイノベーションが起きた。

事業を実施する中で、学生の協力を得て、企業、市民、デザイナー、高校生など多様な人々にインタビューを行い、デザインコンセプトをまとめた結果、「京都大学のもっている優れた人材や豊富なアイデアと、社会のリアルな課題を結びつけて解決を図る、ユニークな取り組みである。解決プロセスには、ワールドカフェやエスノグラフィー、プロトタ



大阪中央公会堂でのワークショップ

イプといったユーザ視点でサービスを指向する手法が徹底的に取り入れられ、プロジェクト成果として【自動検眼アプリ】、【英会話学習支援ツール】といったすぐに事業化できそうな魅力的なサービス案が生まれているところが面白い」として、その手法が高く評価された。



イトーキ東京イノベーションセンター
(SYNQA)(東京会場)でのワークショップ

イノベーション・マネジメント・サイエンス研究部門では、今回の受賞を契機に、この手法を生かしつつ、さらにブラッシュアップを図り、今年度は医学研究科、経営管理大学院とともに、「グローバル・テクノロジー・アントレプレナーシップ・プログラム(GTEP)」として、イノベーション・エコシステムの構築に努めていく。

(産官学連携本部)

訃報

このたび、^{に わよしつく}丹羽義次名誉教授、^{いしばしたけひこ}石橋武彦名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

丹羽 義次 名誉教授



丹羽義次先生は、9月6日逝去された。享年90。

先生は、昭和21年9月、京都帝国大学工学部土木工学科を卒業、同23年9月に同大学院特別研究生を修了、同年11月に京都帝国大学工学部講師に就任された。昭和26年6月に京都大学工学研究所助教授(現在のエネルギー理工学研究所)、同29年3月には、工学博士の学位が授与された。昭和34年7月に同教授に昇任され、同38年4月に工学部に配置換、同61年3月31日まで工学部土木工学科構造力学講座を担当された。原子炉建設副本部長、施設部技術顧問、大型計算機センター長などを歴任された後、昭和61年4月から平成4年3月までは福井工業高等専門学校長を務められ、昭和61年4月に京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、構造物の設計合理化の領域において輝かしい業績をあげられた。特に、ダム工学、トンネル工学に関わる構造解析、設計理論、応力測定技術、岩質材料の破壊機構において特筆した研究を進められ、我が国の電力関連施設整備に尽力された。また、数多くの人材を輩出し、学問の進歩に貢献された。

本学在任中、日本学術会議応用力学研究連絡委員会委員、科学技術庁原子炉安全専門審査会委員、通商産業省顧問などの要職を務められた。また、土木学会大学土木教育委員会委員長として、大学紛争・高度成長期以降の産業構造変革・安定成長の時代背景を踏まえて、画一的教育理念を見直し、学校制度の改革も視野に入れ、技術教育の課題解決に精力的に取り組まれた。以上の功績により、平成7年勲二等瑞宝章を授与された。

(大学院工学研究科)

石橋 武彦 名誉教授



石橋武彦先生は、10月3日逝去された。享年89。

先生は、昭和28年九州大学大学院を修了、兵庫農科大学助教授、同教授、神戸大学農学部教授を経て、同49年京都大学農学部教授に着任、家畜生体機構学講座を担当され、長年にわたり学生の指導、後進研究者の育成に尽力された。昭和63年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和59年3月から同63年2月まで京都大学農学部附属牧場長を務められた。

本学退官後は、昭和63年4月から平成7年3月まで九州東海大学農学部教授を務められた。

先生は動物の解剖と生理を統括した学問分野である生体機構学の形成に尽力され、数々の研究発表を行われるとともに、当該分野の代表的書籍の一つである「家畜の生体機構」を編集された。

また、日本畜産学会評議員・編集委員・理事、日本畜産学会関西支部評議員・顧問、畜産学教育協議会会長として学会の発展に多大な寄与をされた。

これらの業績により、平成16年瑞宝中綬章を受けられた。

(大学院農学研究科)